

# 尾張大根物語

場所

鶴舞中央図書館 2 階

期間

2010 年 10 月 16 日（土）  
～2011 年 1 月 20 日（木）

尾張の役者評判記に“まづは男ぶり細からず、太トからず、色白にさかやき青く、どこへ出しても大立物”と称された「宮重大根郎」をご存知の方はきっとかなりの通の方。それも芸能通ではなくて、食通の方でしょうか。

安永 7 年（1778）の一風変わった評判記である『尾陽名物真那板文台』に登場するのは、「宮重大根郎」、「赤見曾平」、「鵜飼鱒之助」、「冷麦長白」など、どこかで見たり聞いたり食べたりしたことのあるものばかりです。実は、『尾陽名物真那板文台』は尾張名物を役者に見立てた評判記で、それも「真那板（まないた）」とあるように、尾張の食べ物を中心とした評判記なのです。この『尾陽名物真那板文台』では尾張名物が見立誹諧の式に並べられており、「宮重大根郎」は“極上上吉”で“国中の名物先づ（イの）一番に発句”とされています。

一般に「大根」、あるいは「大根役者」と言えば“芸の下手な俳優をあざけっていう語”（『広辞苑』）ですが、本物の「大根」である「宮重大根郎」の評価は高く、辞書にはないよい意味での「大根役者」と言えるのではないのでしょうか。

宮重大根は江戸時代の尾張の名産品として全国に名前の知られた存在で、『尾張名所図会 後編巻之三』の「名産宮重大根」の項には“落合の支邑宮重村に産す。当国の蘿蔔は、尾張大根とて、他邦に類ひなき名物なり。そのうち当所の産を第一として、国君より京都また関東へも御進献あわせられ、その外諸侯方へも贈り給へり”とあります。天保初年（1830）に板行された尾張の名産品番

## 宮重産でない宮重大根

尾張国春日井郡落合村枝郷宮重の産である「宮重大根」は、地名を冠した大根です。ところが、尾張の産物を郡別に列挙した『尾陽産物志』や『尾張国産物』を見てみると、春日井郡だけでなく、丹羽郡・葉栗郡・中嶋郡・海西郡の大根の項にも“みやしげ（宮重）”とあり、「宮重大根」が他の地域でも作られていたことがわかります。

それでも、宮重の産の「宮重大根」は特別な存在で、『尾陽産物志』の春日井郡の末尾には“右産物之内、尾張殿より献上物 宮重大根 落合村”と書かれています。また、天保 12 年（1841）の「春日井郡落合村絵図」にも「御献上宮重大根畑」が描かれています。

付である『鱈名物』にも「瀬戸物」とともに最高位の大関に番付されています（横綱は名誉職で当時の番付にはありませんでした）。

尾張の大根としては宮重大根が特に有名ですが、これ以外の大根の栽培も盛んだったようで、『尾陽産物志』・『尾張国産物』には約 40 種類の大根が記録されています。主な 30 国の「享保・元文諸国産物帳」に記されている大根の品種の平均が 12.1 品種（『野菜の日本史』）ですから、尾張の大根の種類が極めて多かったことがわかります。また、『尾張名所図会 前編巻之二』の「青物市」の図には大きな大根を担ぐ男など数多くの大根が描かれています。また、「名産大根」・“大大根”など 10 種類以上の大根や切干大根・大根菜（「枇杷島互市産物考」）が他の名産品とともに枇杷島青物市で商われ、“府下初め、隣国・近国・三都まで”運ばれました。

展示資料

1	<p>『尾陽名物真那板文台』 名古屋市史資料 市3-84 (『名府玉尽し』と合冊)          『名古屋叢書 第16巻』 名古屋市教育委員会／編 愛知県郷土資料刊行会 1982年          八丈舎主人という不詳の人物による安永7年(1778)の尾張の食べ物を役者に見立てた評判記です。</p>
2	<p>『本草圖譜 卷之四十三』 本草圖譜刊行會 大正7年 15丁 わ499/22</p>
3	<p>「青物市」(『尾張名所図会 前編卷之二』 和A294/30/1-2)</p>
4	<p>「沢庵漬」(『尾張名所図会 前編卷之五』 和A294/30/1-5)          御器所村とその周辺の村では沢庵漬がつくられました。“この大根を東畠と称して宮重方領などの名産とは更に別種なり”とあります。また、『尾張名所図会 後編卷之二』に「切干を製する図」があるように尾張では大根の生産だけでなく、大根の加工品の生産も盛んでした。『昭和農業技術発達史 第5巻』(農林水産技術情報協会 1997年)によると“昭和13年(1938)の作付面積は5500haに達し、その8~9割は宮重ダイコンで、うち6割は沢庵漬用”だったそうです。</p>
5	<p>「鯪名物」(『決定版番付集成』 青木美智男／編 柏書房 2009年 p.322-323)</p>
6	<p>『享保元文諸国産物帳集成 第4巻 再版』 盛永俊太郎／編 科学書院 1993年 p.624-625          「尾張国産物」は幕府の命により行われた産物調べの調査報告書で、尾張国の農作物、草木、魚貝類、鳥獣類、虫類など郡別に列挙されています。同書によると、宮重大根は春日井郡、丹羽郡、葉栗郡、中嶋郡、海西郡の産物として挙げられていますが、このうち春日井郡内の末尾には“右産物之内、尾張殿より献上物 宮重大根 落合村”とあります。なお、別本と考えられている「尾陽産物志」の翻刻が『名古屋叢書』にあります。</p>
7	<p>「尾張名物宮重大根」(『松濤棹筆 五』 名古屋市史資料 市2-32)</p>
8	<p>「宮重大根の図」(『尾張地誌資料 三』 名古屋市史資料 市13-45)          『尾張地誌資料』は名古屋市史編纂室が『名古屋市史』(大正5年~昭和9年刊、全12冊)の編纂に際して数多くの文献から抜書きして筆写した資料集の一つです。同図は「名古屋雑誌」という資料にあるもので、『松濤棹筆』の図を書き写したものと思われます。</p>

9	「宮重大根の献上と贈呈」(『尾張の殿様物語』 徳川美術館 2007年 p.142-143)
	江戸時代には「時献上」と称して大名が四季折々に将軍家に物産などを献上することが行われましたが、尾張藩からの献上物の中には国産物の「宮重大根」や「宮重大根種」が含まれていました。『尾張の殿様物語』には尾張徳川家の儀礼の一つとして宮重大根を将軍家への献上品に仕立てる際の包み方の手順について詳しく描いた図が収録されています。また、天保12年(1841)の「春日井郡落合村絵図」に「御献上宮重大根畑」が描かれていることも紹介されています。

10	『日本山海名物図会』 平瀬徹斎／著 名著刊行会 1969年 p.84
	尾張大根について「大根甚だ大きにして風味かるく、大上品なり。日本にて大根の第一なるべし。…」と紹介しています。猿猴菴(高力種信)著の「矢立墨」(『随筆百花苑 第11巻』 森銑三／[ほか]編 中央公論社 1982年)に“尾張大根とて車に一本づけにして引、或ハ二人して釣たるていを畫けるは、同國方領村の大根なり、至て大なり。宮重ハ左のミ大からねど美味なるを賞ず”とあることから、図の大根は宮重大根ではなく方領大根だと考えられます。味で有名なのが宮重大根、大きさで有名なのが方領大根で両者は尾張を代表する二大ブランド大根といえますが、文政10年(1827)の『尾張八丈』に“尾張大根 同郡(春日井郡)宮重村より出之 献上になる 並海東郡方領村より出之”とあるようにともに「尾張大根」と呼ばれることがあり、両者はしばしば混同されていたようです。

11	「青物魚軍勢大合戦之図」 歌川広景 (『錦絵日本の歴史3』 尾崎秀樹 日本放送出版協会 1982年 p.124-125)
	歌川広景による「青物魚軍勢大合戦之図」の中央上部には“大根之助二股”という擬人化された大根が描かれていますが、この“大根之助二股”の顔には「八」の文字が書かれているように見えます。「八」の文字と言え、名古屋市の徽章の「丸八」が思い浮かびます。そして、名古屋市の徽章のルーツは尾張藩の合印(略章)の「丸八」です。江戸時代の人々は「八」の文字の描かれた「大根」を見て「尾張藩(藩主)」を連想したようで、『幕末維新の風刺画』(南和男／著 吉川弘文館 1999年)によると早稲田大学図書館西垣文庫所蔵の同図の背面に“大根之助二股 尾張卿(徳川慶恕) 大根は尾張国名産 “など登場人物を読み解く書き込みがあることが紹介されています。

12	『宮重大根純種子保存委員会10周年記念誌』 宮重大根純種子保存委員会10周年記念事業実行委員会 2004年
	宮重大根の原産地の旧春日町(平成21年10月1日に清須市と合併)では、準備期間を含めて平成4年から原種の復活を目指した活動が行われています。表紙のマスコット・キャラクターは平成15年に募集・決定した「宮重ダイちゃん」です。

『日本山海名物図会』に“大根甚だ大きにして風味かろく、大上品なり。日本にて大根の第一なるべし”とあるように尾張大根は日本一とされ、尾張の御国自慢の一つでした。川柳集「誹風柳多留」にも“大根まで御国を名乗る尾張味噌”とありますが、自分のことを自慢することを「味噌を上げる」・「手前味噌」などと言うことからすると、尾張の人が自国の大根を自慢する様子を風刺したものでしょうか。

また、「誹風柳多留」には“宮重大根名古屋が元祖なり”という川柳もあります。これは江戸の練馬大根がもともと五代将軍徳川綱吉が尾張から種を求めて栽培を奨励したものであることを踏まえたものだと思われ、『日本山海名物図会』にも前述の文章に続けて“江戸ねりま大根、大きさ尾張大根におとらず。しかれども、風味は尾張よりもはるかにおとれり”と書かれています。

尾張藩士朝日文左衛門の日記である『鸚鵡籠中記』にも「尾張大根」が何度か登場します。しかし、その登場する場所は食膳の上ではなく、世相を風刺した落首の中です。六代将軍徳川家宣が没したときの落首には“味の能尾張大根喰はせで小なべたてに而代をおくろとは”とあります。これは、病篤くなった家宣が“我後の事をば、尾張殿（四代藩主徳川吉通）に譲り・・・”（『折たく柴の記』）と一時は考えたものの、結局はわずか4歳の鍋松が七代将軍徳川家継となったことを風刺したものです。また、八代将軍が尾張藩からではなく紀州の徳川吉宗になったときの落首として、“公方かきを紀伊国みかん植かへて引残されし尾張大根”、“紀の国のみかん立花葉はさかり尾張大こん今は切ぼし”などを書き留めています。

このように尾張大根は尾張の名産品にとどまらず、尾張藩（藩主）を表すシンボルとして用いられ、「青物魚軍勢大合戦之図」や「諸色大合戦」などの錦絵にも擬人化された「大根」が描かれています。これらは「尾張藩（藩主）」を表したものだと考えられています。

宮重大根は昭和20年代まで尾張地方を中心に大面積で栽培されましたが、連作による地力の低下やウイルス病の蔓延などの理由により作付面積は激減し、昭和30年頃に産地としては消滅したとされています。しかし、現在の日本の生食大根の主要品種である青首大根のルーツは宮重大根とのこと。もし、今晚のおかずの大根が青首の大根だったら、それは宮重大根の子孫と考えてよさそうです。

#### 展示資料以外の参考資料

『広辞苑 第6版』 新村出／編 岩波書店 2008年

『愛知県園芸発達史』 愛知県園芸発達史編さん会／編 愛知県 1981年

『野菜の日本史』 青葉高／著 八坂書房 1991年

『芭蕉書簡大成』 今栄蔵／著 角川学芸出版 2005年

『誹風柳多留全集』 岡田甫／校訂 三省堂 1977-1984年

『温故知菜 菜の巻』 愛知農業普及協会 2002年

#### 家康や芭蕉も食べた宮重大根

「尾張徇行記」の落合村の箇所には“宮重大根ノ由来古義拔萃”があります。これは宮重の庄左衛門が寛文12年（1672）に記したもので、尾張に入国した初代藩主徳川義直が“一両年程大根御上り（献上）”しなかったところ、父の家康から大根についてのお尋ねがあり、再び献上用の“上り大根”を作るようになったことなどが書かれています。

また、門人の知足（法号寂照、鳴海の富豪）から「宮重大根」を受け取った松尾芭蕉はその返礼の手紙に“御国名物宮重大根式本被懸芳慮忝、尤賞翫可仕候”と記しています。

名古屋市鶴舞中央図書館

2010年10月発行